

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32510

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22219

研究課題名（和文）多文化共生社会実現に向けた道徳授業海外協働実践研究

研究課題名（英文）Overseas Collaborative Practical Research on Moral Education for Realization of a Multicultural Society

研究代表者

松田 憲子（MATSUDA, Noriko）

神田外語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70874519

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は多文化共生社会実現に向けた道徳授業について、小学校の道徳教科書の教材分析、韓国教科書を基にした教材と指導方法の開発及び国内外での実践から検討したものである。小学校道徳教科書(2019)の全教材(1721本)のうち海外素材教材は17.1%、交流の程度が高い教材は4.7%に止まり、内容項目も偏りが見られた。そこで、韓国の道徳教科書から知見を得、「国際理解」「相互理解・寛容」の教材を開発した。国内及びフィリピンで実践した結果、両国の児童生徒から高い評価を得た。またフィリピンでは、現地教員との協働実践により、授業のねらいに深まりがみられるとともに、双方の道徳教育について理解し合うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の中の分析によって、小学校の道徳教科書には、海外との交流がある教材が少なく、内容項目にも偏りがあることがわかった。「共生する力」を育むために、海外素材教材で不足している「相互理解・寛容」の教材を、韓国の道徳教科書の知見を活かして開発した。指導法では、教材から知識を得、心情を理解し、実践的に行動を考えるステップが有効だった。フィリピンでは現地教員と協働で実践し、子どもたちの学びを深めるとともに、両国の教員同士が双方の道徳教育について理解を深めることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines moral education for the realization of a multicultural society, based on an analysis of elementary school moral textbooks, the development of teaching materials and instructional methods based on Korean textbooks, and practices in Japan and overseas. Of all the materials (1,721) in the 2019 elementary school moral textbooks, only 17.1% of the materials used overseas as their subject, and 4.7% had high degree of interaction with other countries, showing a bias in content items. Therefore, we developed teaching materials on "International Understanding" and "Mutual Understanding and Tolerance" based on the findings from Korean moral textbooks. This has been put into practice in Japan and in the Philippines, and has received high praise from students in both countries. In the Philippines, through collaborative practice with local teachers, we were able to deepen the aims of the lessons and understand each other's moral education.

研究分野：道徳教育

キーワード：道徳科 多文化共生 韓国道徳教科書 相互理解 国際理解 教材開発 海外道徳授業

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2018年に改正入国管理法が成立し、在留外国人は2019年末で293万人を超えて過去最高となった。外国籍の児童生徒も増加している。今後、ますます「国内の国際化」が進み、「多文化共生社会」が現実のものとなるだろう。「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」でも、「今後グローバル化が進展する中で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きること」を課題の一つとして挙げている。

一方、土田(1998)は、国際化について「道徳資料(教材)が少ない」ことを指摘し、「国際理解」だけでなく、「差別・偏見」や「相互理解」等、互いの違いを認め合う教材や授業の必要性を指摘している。しかし、指摘から20年を経てもこの課題は解決されているとは言えず、「共生」を目指した道徳教材開発や指導方法の検討は課題として残っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、多様化する多文化共生社会に向けて、「共生」する力を育む道徳教材とその適切な指導方法を開発することである。開発に当たっては、国内実践とともに海外(フィリピン)においても実践し、日本とフィリピンの教員・研究者が協働してあたることで、今後の多文化共生社会に向けての取り組むべき視点を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するため、まず、現行の道徳教科書の教材を把握する。教材の中に海外の関連する内容の素材が含まれている教材(以下、海外素材教材)がどれだけあるか、2019年度から使用されている小学校検定教科書8社の全学年、1721教材を分析する。分析は、海外素材教材の数、内容、内容項目、教材における海外との交流の有無や程度について行い、教科書教材における海外素材教材の現状を明らかにする。

この教科書教材の分析を基に、「多文化共生」を目指す新規教材を指導方法とあわせて開発し、研究協力校(国内)において新規教材を用いて実践を行う。実践を、授業記録、ワークシートの記述、アンケート、参観者のコメントから分析し、教材の有用性と改善点を検討する。

検討を生かし、フィリピンで実践する教材を開発する。フィリピンでの実践は、新規教材と、2018・2019年と実践を重ねた「四本の木」の2教材とし、新規教材では問題場面の解決や相互理解について、「四本の木」では互いの価値観を認め合いながら自分の生き方を考えることをねらいとする。実践後には国内実践と同様に分析し、教材や指導方法について検討し、多文化共生に向けた教材・指導方法の改善を図る。

4. 研究成果

(1)教科書教材の分析

2019年度から使用されている小学校検定教科書8社の全学年、1721教材について、教材の中に海外に関連する言語や知識等の素材が含まれている教材(以下、海外素材教材)が、どれだけあるかを分析した結果、海外素材教材は295本(17.1%)であった。その内容は、海外や日本の文化理解や国同士の友好関係に関するものなど多岐にわたったものの、多くは場面設定が海外の物語(63本)、目標とする存在(43本)、偉人(42本)と、海外との交流が描かれていないものであった。

また、海外素材教材の主たる内容項目は、「国際親善・国際理解」(65本)、「希望と勇気、努力と強い意志」(39本)であり、「相互理解」(13本)、「友情、信頼」(13本)のような交流に関わる内容項目は少ない。さらに、海外素材教材の中で、海外と日本(人)の交流場面があった教材は142本と半数以下であり、その程度を分析すると、人物同士の関わりがあるなど交流の程度が高い教材は81本(4.7%)しかなかった。この結果は土田(1998)の副読本の資料分析とほとんど変わっていない。今後、交流がある教材の作成が必要であることが明らかになった。

多文化共生社会に向けて「共生」する力を育むには、「公正、公平、社会正義」「相互理解、寛容」「個性の伸長」「友情、信頼」等をねらいとした交流教材を増やし、「外国人と共に暮らす多文化共生社会の形成」と結びつく指導方法を工夫することが課題である。

(2)韓国道徳教科書を基にした教材「一つの世界へ」「悩み相談室」と国内実践

韓国道徳

韓国の道徳教科書は、各学年6単元構成であり、日本のように道徳的諸価値についての理解を深めるものではなく、自分ならどうするか等、判断力、実践力を育成するタイプの教材が多い。そこで、韓国教科書の教材の趣旨を理解しつつ、日本の道徳授業用に教材を改作し、単元(2時間扱い)開発を行い、実践を通してその成果と課題を明らかにした。

教材開発「一つの世界へ」「悩み相談室」

韓国道徳教科書(4年生)の「6 一緒に夢見る虹の世界」を翻訳し、韓国道徳授業で目指している姿を理解した。韓国道徳教科書や道徳授業の理解については、韓国ソウル市小学校教員に協力を依頼し、日本向けの内容にした2時間扱いの単元を作成した。授業展開は、まず導入で問

題の解決の仕方を学ぶ、それを基に心情を考えて問題場面の解決を図る、さらに自分ならどうするか実践的に考えるという3段階で構成した。

【開発教材1 「一つの世界へ」(ねらい「国際理解・国際親善」)】

(導入)ケンのクラスにはいろいろな国から来た子供たちがいる。インドから来た子は給食のたこに驚く。ケンは国際交流会でインドのカレーの香りに驚いたが、アフガニスタンから来た子が納豆を食べようとしているのをみて考え込む。

(心情を考えて問題解決する)宿泊学習で、ケンのグループでは、ヒンドゥー教の子は親子丼、イスラム教の子は牛丼、韓国から来た子はカツ丼を選んで一緒に食べた。翌日は、サンドイッチを自分たちで作る。ケンたちは、ハムを抜いたサンドイッチを作って一緒に食べた。

導入で宗教や国による食文化の違いを理解し、「なぜハムを抜いたサンドイッチを作って食べたのか」を考える。「国際理解」を主なねらいとし、違いを乗り越えて「一緒に食べた」のはなぜか考えることを通して、「思いやり」や「友情」についても考える。

【開発教材2 「なやみ相談室」(ねらい 相互理解・寛容)】

(導入)転校生のゆかりは前の学校で野球をしていて、今の学校でも続けたいとケンに相談する。しかし、今の学校の野球チームは男子しかない。ケンはどう答えるか迷う。

(心情を考えて問題解決する)方言で話すと周りで見られる、左利きのため隣の人に腕がぶつかる、髪の毛が茶色い、長い間入院していたなど、悩みをもつ人の相談について考える。

(実践的に考える)「外国人のおじさんが日本のマナーを知らなかったら?」「タイの友達のお母さんが初めてタイ料理を作ってくれたら?」等の11問にすごろくを通して答える。

ゆかりの悩みから問題を解決するにはどうしたらよいか考え、それを生かして4人の悩み相談に答える。様々な悩みへの相談を通して「相互理解、寛容」のねらいに迫る。

授業の後半には、第1・2時に関わる内容のすごろくを行い、自分事として考えさせる活動を位置づけた。

実践の概要

千葉市内小学校2校の4年生、6クラスで、2021年11月、12月に実践した。各クラスとも意欲的に取り組んでいた。第1時では、国や宗教による食文化の違いに驚いた児童が多かった。主発問「夕飯の一緒とサンドイッチの一緒は何が違うでしょう」に、「夕飯は場所が一緒で、サンドイッチは一緒のものを食べる」「一緒のものを食べているほうが、同じと思える」など、違いを乗り越えようとする気持ちを考えた。子どもたちは異なる文化に関心を示し、互いを理解することの大切さに気付いた。

第2時では、「違い」に悩む人について考えた。導入ではゆかりの気持ちを重視し、「女の子一人で気になるなら誰か誘えば」など、ゆかりを思いやる意見も出た。4人の悩み相談では、悩んでいる人を励ますなど相手の気持ちを考え、「様々な人が一緒に暮らすために」は「お互いをわかることが大切」のように考えを深めた。すごろくでは異文化や違いに出会ったらどのように対応するか、一つ一つの問いに自分事として答える姿がみられた。授業の内容を振り返りながら自分ならどうするか考える実践的な活動に、子どもたちは意欲的に取り組んだ。

分析

ワークシートの「学習を振り返って」の記述内容をカテゴリー分析した(複数回答)。第1時では「国際理解(食べ物)」「国際理解(文化)」(54.8%)など、国際理解に関わる記述が多く、次に国を超えて様々な人が共に暮らす「多文化共生」(50%)「思いやり」(28.6%)、また「助けてあげたい」など行動に関する記述(34.4%)などがあった。第2時では、「相互理解」(74.4%)や「多文化共生」(26.8%)に関わる記述が多く、ねらいを達成したといえる。

授業後に4件法で得たアンケートでは高い評価を得た。「学習に集中して取り組んだ」に肯定的評価をしたのは97.6%(第1・2時とも)。「友達の意見をよく聞くことができた」は98.8%(第1・2時とも)であった。「すごろくでは自分の考えを話すことができた」では肯定的評価が98.8%、強い肯定が82.5%と非常に高かった。授業の参観者からも「(すごろくによって)子どもが自分のこととして考えられた」「自分で判断して答えていた」等、高い評価を得た。

成果と課題

韓国道徳教科書を基に多文化共生を目指した道徳教材を指導方法と併せて開発することができた。自分事として実践まで考えさせる指導方法は、児童および教員からも高い支持を得た。今後は心情面の育成と併せて活用を検討していく必要がある。

(3)韓国道徳教科書を基にした教材開発「Paulの悩み」とフィリピン実践

国内実践を基にフィリピンで2つの授業実践を行った。1つ目の授業は、新規教材「Paulの悩み」である。韓国道徳を基に、葛藤場面について考える教材を開発、実践した。2つ目の授業は、2018・2019年度とフィリピンで実践を重ねてきた「四本の木」である。フィリピンの「バリュー教育」の教えとも重なる本教材は、これまで日本の教員により実践してきたが、今回は日本の教員と現地の教員との協働で実践した。

教材開発「Paulの悩み」

葛藤場面について考える教材を、国内実践の3段階の構成を生かし、韓国道徳教科書を基に「相互理解」「寛容」をねらいとして開発した。

(導入) フィリピンの Paul の隣に韓国人の家族が引っ越してきた。しばらくして隣人から「もう少し静かにしてほしい」と言われ、うるさいと思っていた Paul は驚く。
(心情を考えて問題解決する) Paul はようやく友達と予定が合い、久しぶりにバスケットボールの試合の約束をした。しかし帰宅後、母親に小さい弟たちと留守番を頼まれた。
(実践的に考える) カードに書かれた「転校生が自分の言葉が違うことを気にしていたらどうする?」「知らない言葉で外国人に話しかけられたらどうする?」等の 16 問に答える。

実践の概要

実践は、サンカルロス大学附属初等中等学校ノースキャンパス校(フィリピン)の Grade 6(小6) Grade 7(中1) 1、7-2の3クラスで、2023年2月22,23日に行った。

授業は日本の現職教員2名によるチームティーチングで行った。教材はスライドを作成し、視覚的理解を図った。問題場面や Paul へのアドバイスについての話し合いでは、授業者の1名が Paul 役になって聴くことでその場の状況がリアルになり、子どもたちが自分事として話し合うことにつながった。授業の進め方がフィリピンの授業と違う際には現地校教員の支援を得てスムーズに進めることができた。

導入「音に対する感覚の違いからのトラブル」は、Paul の「悲しい」気持ちに気づき、「謝ったらいい」という意見が出た。韓国の道徳教科書から「互いの気持ちを伝え合う」ことを知り、Paul も「隣人と気持ちを共有するとよい」と解決について考えた。次に「Paul が友達とのバスケットと母親からの頼みの間で迷う」場面では、どのクラスでも圧倒的に「母親のいうことを聞く」「弟を連れていく」という意見が多く、家族に対する強い思いを感じた。授業者が「友達はどうする?」と問い返すと、「弟の世話をしてから行く」「友達に後で行くと伝える」など、友達の気持ちも考えた発表があった。話し合いの後、授業者は問題解決には「think about each other」が大切だと板書した。実践的に考える段階では「カードに書かれた場面」に対して、迷いながらも、自分の考えをグループ内で発表するようになった。

3クラスで実践する中で、授業者は発問や指示を明確するなど改善を図った。Paul へのアドバイスでは理由を確認し、カードに書かれた場面の言動でも理由を聴き合うことを指示することで子どもたちも意識する様子が見られた。

分析

ここでは、3回目実践した G7-2 の分析を記載する。

ワークシートに記入した「Paul へのアドバイス」をカテゴリーごとに分析した(複数回答)。「母親のいうことを聞く」のような「家族を優先する」(43.5%)内容が最も多く、「弟を連れていく」(40.6%)、「家族、友達などに相談する」(28.1%)、「自分の気持ちを伝える」(18.8%)などの記述があった。実践的に考える「カード」を活用したワークについて、「印象に残ったカード」を分析すると、様々な「違い」に関するカードを選択した生徒が記入者の60%と最も多かった。カードを選択した理由の分析では、「国際理解」「相互理解」「公正、公平」「思いやり」など多文化共生に関わる記述がみられた。

振り返り(「授業から何を感じ、学んだか」)の記述では、「問題の解決の仕方」(60.0%)、「相互理解・気持ちの共有の大切さ」(46.7%)が多かった(図1)。本時のテーマである葛藤場面における問題解決を意識するとともに、授業のねらい「相互理解」を達成したといえる。

授業後のアンケートでは、「授業は面白かったか」「ほかの人の考えからいろいろな見方をすることができたか」に対して肯定的評価が記入者の100%であった。「友達の考えをよく聞くことができたか」(肯定的評価96.7%)「自分の考えを伝えることができたか」(肯定的評価93.4%)「学んだことを自分のこととして考えることができた」(96.7%)もいずれも高い評価であった。

成果と課題

国内実践を踏まえ、葛藤場面での「相互理解」に向けて開発した教材を基に、授業でねらいに迫ることができた。中心発問に対してワークシートの記入には「家族を大切にする」が多く、導入の「相互理解」の視点は薄かったが、授業の振り返りでは「相互理解」への意識が高く、授業の中で意識が高まったことから、3段階の指導方法は有効であったと考える。

一方で、フィリピンでは「家族が第一優先」という意識が強く、「友達」と「家族」間では、葛藤場面が成立しにくかった。実態を理解した教材作成が必要である。

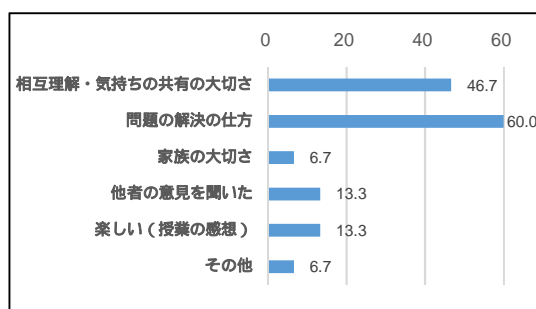


図1 授業の振り返り カテゴリー分類(%)

(4)「四本の木(Four trees)」の実践について

教材「四本の木」について(これまでの実践と教材の概要)

「四本の木(Four trees)」は、折れない心を育てるレジリエンス教材である。土田らが2018年、

2019年にサンカルロス大学附属初等中等学校サウスキャンパス校でGrade5(小5)を対象に実践し、児童や教員から高い評価を得ている。価値の明確化理論に基づいた「自分の生き方を四本の木に重ねて考える授業」は「Value教育」の授業でも活用できると評価された。

大風で折れてしまった一樹をみた三本の木(大樹・優樹・友樹)はどうしたら折れない木になれるのか考えた。大樹はしっかりと根をはり、幹を太くして、折れない木を目指し、優樹はしなやかで柔軟な木を目指し、友樹は仲間と共に森をつくって支えあった。一方、折れた一樹も小さな芽をだし、新しい成長を始める。

実践の概要

今回の対象はGrade5(小5)-1、5-2の2クラスで2023年2月22、23日に実践を行った。第1回授業(5-1)は日本の現職教員2名によるチームティーチングで行った。教材の提示はこれまでと同様であったが、今回は、授業展開を改善し「そのように生きていくために、自分が何をしたらよいか考える」(表1)を加え、これからの自分の生き方を具体的に意識させるようにした。この実践はこれまでと同様に児童の評価も高く、ねらいもおおむね達成できた。

授業後の現地教員との協議会では教材について高

表1 「四本の木」の展開(2023)

い評価を得た。「よりよい人生を生きるために自分自身を四本の木に投影して自分自身の経験と結びつけながら考えることができた」等のほか、課題として「深める問いが必要である」ことを指摘された。そこで協働実践を提案したところ、快諾され、Value教育として価値を深めるために、第2回授業(5-2)は現地教員(S先生)と協働で実施することにした。前半部分(表1～)を日本人教員が担当し、後半は現地教員(S先生)が担当した。

四本の木生き方について動画を見る。
四本の木がどのような木なのか確認する。
どの木の生き方に共感するかを付箋に書く。
グループでシェアする。
付箋を黒板に貼り、その木を選んだ理由を全体で共有する。
どのような木になりたいか、再度考える。
その木のように生きていくために、自分が何をしたらよいかを考える。(2023年追加)
全体でシェアする。
振り返りをする

S先生は四本の木の特徴をそれぞれ「人間の基本的特徴」と「価値/態度と行動」に分類整理し、それぞれの「価値」について子どもたちに問いながら深める授業を展開した。キリスト教(カトリック)を背景とした学校であり、「Value」の授業は宗教的な側面が感じられる展開であった。

分析

授業後のアンケートを比較すると、「この授業が面白かったか」に対して、第1回授業(5-1)では強い肯定(「とてもそう思う」)が100%であった。「学んだことを自分のことのように考えることができた」は、肯定的評価が100%であり、強い肯定も87.5%と高い評価を得た。一方、第2回授業(5-2協働型)は、肯定的評価が94.1%であり、強い肯定が79.4%であった。

肯定的評価が97.0%であり、強い肯定が69.7%であった。

一方、振り返り(「今日の授業で学んだこと」)の記述内容分析(重複あり)では、第1回授業(5-1)はねらいである「自分の生き方を考える」に関連した記述が28.1%に対し、「四本の木」に関連した記述は68.8%であった。協働実施をした第2回授業(5-2)は55.9%では79.4%の記述があった。一概に比較はできないが、「四本の木」をもとにした協働型「Value」の授業は、児童により自分の生き方を深く考えさせたことがわかる。

成果と課題

「四本の木」はValue教育を実施する学校で児童や教員から高い評価を得ている。これは教材と指導方法が海外で活用できることを示唆している。また、現地教員との協働実施により、それまでの実践の課題であった「言葉の問題」を解消し、深く考えさせることができた。今後の課題として、現地教員の授業展開方法や意図を理解することが挙げられる。今後はオンラインでの打ち合わせの実施等により、教員同士が相互理解をした上での授業実践にしたい。

(5)研究のまとめ

本研究を通して、教科書教材(1721本)のうち、海外素材教材で高い交流場面のある教材は81本(4.7%)に止まり、内容項目も「国際理解」に偏っていることが明らかになった。

そこで多文化共生社会に向けて「共生」する力を育むため、韓国道徳教材に基づいた「国際理解」「相互理解」の新規教材を開発し、実践的な指導方法(問題の解決の仕方を学ぶ、心情を考えて問題場面の解決を図る、自分ならどうするか実践的に考える)で展開した。「一つの世界へ」「悩み相談室」を国内で、「Paulのなやみ」をフィリピンで実践した。授業はねらいを達成し、児童生徒や現地教員から高い評価を得た。さらに「四本の木」では現地教員と協働で実践することで、授業のねらいに深まりがみられるとともに、双方の道徳教育について理解し合うことができた。

また、実践した現職教員は多文化共生社会への視点を実感するなど意識の変容が見られた。

今後は、さらに実践的な指導法を生かした教材(「公正、公平、社会正義」「友情」等)開発や本実践研究を広める必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松田憲子 土田雄一	4. 巻 第25号
2. 論文標題 多文化共生社会実現に向けた道德授業の構築を目指して -韓国道德教科書を基にした教材開発と実践-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 81p-93p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田憲子 土田雄一	4. 巻 第24号
2. 論文標題 多文化共生社会実現に向けた道德授業の構築を目指して -教科書教材の分析-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 千葉大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 23p-34p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松田憲子 土田雄一
2. 発表標題 多文化共生社会実現に向けた道德授業の構築を目指して -韓国道德教科書を基にした教材開発と実践-
3. 学会等名 日本道德教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田憲子 土田雄一
2. 発表標題 多文化共生社会実現に向けた道德授業の構築を目指して -教科書教材の分析-
3. 学会等名 日本道德教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	土田 雄一 (TSUCHIDA Yuichi) (10400805)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------